

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 09 月 05 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	井上 漱太

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
イギリス、オックスフォード大学
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ハトの帰巢経路に関する実験の見学
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 8 月 5 日 ~ 平成 29 年 8 月 9 日 (5 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
野生動物研究センター 狩野文浩特定助教
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
オックスフォード大学のドラ・ピロ教授のラボを霊長類研究所の川口ゆりさんとともに訪れた。ドラ・ピロ教授は不在だったものの、野生動物研究センターの特定助教の狩野文浩さんが同大学で研究していることもありお世話になった。 今回の渡航ではハトに GPS を装着し、帰巢経路高精度で記録することを可能にした実験を主に見学した。私は興味自体が近いこともあり、論文、ドラ・ピロ教授が日本に来た際におこなったトークで内容は知っていたものの実際に見てみるとやはり感動があった。フィールドで調査をおこなっていると、動物に何かを装着し、動物に操作を加えるということはまず行うことは不可能だ。仮にロガーを装着したとしても、基本的にはつけっぱなしだ。自分が見たい現象にフォーカスし、条件を変えながら明らかにしていくアプローチは非常に興味深かった。 狩野さんは類人猿の視線の研究をしていることもあり、ハトの頭にカメラを装着し飛行中の視線を捉えるという実験も立ち上げていた。手芸店で材料を自分で購入してきて、試行錯誤をしながらハトにあうものを作ったのだという。その工夫、熱意、実行力には驚かされ、自分のフィールドでももっと何かできるのではないかと、モチベーションを高めてくれた。フィールドと実験室ではアプローチは異なるし、得られるデータの質も全く異なるだろう。しかし、目指すところは本質的には同じはずで、その両方を組み合わせることが非常に有効な手段なのだろうと感じた。自分もロボワークもフィールドワークもできる研究者になりたいと思った。 オックスフォード大学で研究している日本人研究者の方にもお会いし、自身の研究を発表し意見をいただくこともできた。このようなラボ見学という形で、他の研究室を訪れ、研究者に出会い、議論することは予想以上に価値のあるものだった。研究する場所が変われば考え方も変わる。同じ分野の研究者でも全く異なる考え方を持っており、その話を聞くことは自分の考え方にも幅を持たせるものであり今後の研究にも影響を与えるだろう。学会で会い会話をするよりも、会話自体が密に深くなるので、私たちのような学生にとってはこちらの方が貴重なのではないかとすら感じた。今後もこのような機会があれば、積極的に交流し、見聞を深めたい。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



GPS とカメラを装着したハト



生態学の聖地とされるワイサムの森

**6. その他** (特記事項など)

本渡航を支援していただいた PWS、ならびに現地での案内をしていただいた狩野文浩特定助教には感謝申し上げます。また、複雑な出張処理をおこなっていただいた PWS 支援室の皆様にも感謝いたします。